

修士論文要旨

蓮如に学ぶ

——『御文章』を読む——

岡 本 隆 英

目 次

序 論

第一章

第一節 真宗再興の思い

第二章 『御文章』述作の意図と背景

第一節 述作の意図

第二節 蓮如上人の教化態度の特色

第三章 『御文章』を読む

第一節 一帖

一帖第二通 出家発心章／一帖第一三通 此方十劫邪義章

第二節 二帖第四通 横裁五意趣章

第三節 三帖第六通 唯能常称章

第四節 四帖

四帖第一一通 機法一体章／四帖第一四通 一流安心章

第五節 五帖

五帖第一通 末代無智章／五帖第五通 信心獲得章／五帖第一〇通 聖人一流章／五帖第一一通 御正忌章

第四章 『御文章』の特徴

第一節 『御文章』の全般的な特徴

第二節 『御文章』での経、釈等の引用

第十八願／南無といふは帰命、またこれ発願回向の義なり／聞其名号 信心歓喜／光明遍照十方世界 念仏衆生攝取不捨／上尽一形下至一念／唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩／即得往生住不退転／一念發起入正定之衆／その他

第五章 『御文章』伝道とその課題

第一節 『御文章』の法話実践

第二節 『御文章』伝道での課題

結 論

今後の私自らの法話活動の糧として、蓮如に学びたい、つまり蓮如を通して親鸞聖人のみ教えを学ぶとともに、蓮如の伝道の特性があれば、その特性を学びたいと考えて、『御文章』を

読んだ。

具体的には、これからの伝道活動を念頭において、テーマを、「蓮如に学ぶ—『御文章』を読む—」とし、内容的には、次の課題を設定した。

- 一、『御文章』述作の意図と背景を探る。
- 二、『御文章』を読み、それをわかりやすく意識する。
- 三、『御文章』の特徴を把握する。主として経、釈等の引用の特徴を問う。
- 四、『御文章』法話の実践を試みて、課題を探る。

初めに、『御文章』述作の意図と背景についてまとめた。

十五歳にして真宗再興の志を立てた蓮如上人は、長祿元年（一四五七）の本願寺第八代を継職後、祖意にかえるという強い思いから「正信偈和讃」の開版、『御文章』述作、「六字名号」の授与などの教化活動を進めていく。

蓮如上人の、『御文章』述作理由が、『蓮如上人遺徳記』に示されている。宗祖の先例を受継いでなされた『御文章』述作のその意図は「一念帰命のことわりを勧め、念持の義を詳しく明らかにして、人びとに難信金剛の真信を獲得せしめる」ところにあると明記されている。つまり、他力信心の念仏の行者を輩出することにあつた、人びとに浄土真宗のみ教えを、「信心正因、称名報恩」を伝道することにあつたのである。

また、この時代は、戦乱や飢饉、疫病の流行、一揆が続く混乱の時代でもあつた。苦しむ人々をみて、蓮如上人は、その救済を考えられたにちがいない。さらには、ご自身の生い立ち、さびさびとした本願寺、他門他宗の繁盛、異義などによる混乱なども背景にあつたであろう。

『御文章』述作の意図は、ここにあつた。簡潔な文章で教えをしるし、門徒にあたえ、彼らが参集する席において読み聞かせた。そして『御文章』での教化成果は、教団の拡大に現れている。

第二に、『御文章』を意識した。

対象は、『御文章ひらがな版』記載分、三五通のうち、蓮如教義（信心正因・称名報恩、たのむたすけたまへ、六字釈、機法一体、平生業成）に関するもの、異義批判に関するもの、経・釈の引用に関するものを合わせて十通を選んだ。意識する目的は、法話するための意識で、背景・筋立て・意図を把握するためである。

第三に、『御文章』の特徴をまとめた。

『御文章』を全般的にみると、その特徴として教義的内容の特徴、課題の特徴、表現の特徴、経・釈等の引用の特徴がある。教義的内容の特徴として、「信心正因・称名報恩」、「たのむた

すけたまへ」「六字釈」「機法一体」「平生業成」などが説かれている。課題の特徴として、十劫秘事、無信単称、布施だのみなどの異義を厳しく誡めている。表現の特徴として、「たのむたすけたまへ」、「後生の一大事」、「なにのやうもなく」などのわかりやすい言葉で説かれている。

今回、経・釈等の引用という特徴に注目した。

蓮如上人は、『御文章』（五帖八十通）の中に、経（浄土三部経）、釈等（七祖、宗祖の釈）から二十七の文が引用されている（但し重なっての引用は一つと数えている）。その中から、蓮如上人のご教化の中心である「信心正因 称名報恩」に深く関わるであろう八つの文を、つまり「第十八願」「南無といふは帰命、またこれ発願回向の義なり」「聞其名号 信心歓喜」「光明遍照十方世界 念仏衆生摂取不捨」「上尽一形下至一念」「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」「即得往生住不退転」「一念發起入正定之聚」を選んで、その意を問うたのである。具体的には、個々の文の引用例文を取り上げ、その意図を把握する。その文の出典を示す。その文にかかる七祖、宗祖の釈を示す。最後に、引用意図を示し確認した。そして次のように全体をまとめた。

①「第十八願」「南無といふは帰命、またこれ発願回向の義なり」「聞其名号 信心歓喜」「光明遍照十方世界 念仏衆生摂取不捨」「即得往生住不退転」「一念發起入正定之聚」は「信」にかかわることであり、信心正因を明確にしている。「上尽一形下至一念」「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」は「行」にかかわることであり、称名報恩を明確にしている。

②従って蓮如上人が、個々の御文章で経、釈等の引用しているのは、信心正因・称名報恩を分かりやすく説き、それを繰り返し強調し、ご教化するためであると窺える。それゆえに『御文章』全体でも信心正因・称名報恩を主張していると捉えることができる。

③また、経、釈等の引用は、信心正因・称名報恩が、経、七祖、親鸞聖人、蓮如上人と相承されたみ教えであることを示唆している。だから、聖人一流なのである。

第四に、『御文章』の伝道と課題をまとめた。三帖第六通「唯能常称章」を手がかりとした「南無阿弥陀仏というのはどういう意味ですか」という法話実践報告を述べるとともに、法話での一層の工夫を課題とした。

以上、『御文章』を読ませていただいて、『蓮如上人御一代聞書』（『浄土真宗聖典』註釈版一二七一頁）の、

『御文』は如来の直説なりと存すべきのよしに候ふ。形をみれば法然、詞を聞けば弥陀の直説といへり。

というお言葉は、真実であると受けとめることができた。

現在、混迷の時代である。死んだらしまいときめこんでいる人がいる。仏教から離れる若い人たちもいる。無縁社会とも言われる。だからこそ本物を志向する時代である。真実が求められる。南無阿弥陀仏が求められる。

そこに、いただいた私の役割がある。弥陀の本願をお取次ぎすることである。聖人一流を相承し、自信教人信に基づき、時機相応の伝道活動された蓮如上人に倣って、積極的に『御文章』を活用したご法話をおこない、寄り添うように、よりやさしく、より多く話し、多くの方がたが念仏とのご縁を結ばれるよう、努力していく。

このようなお念仏のご縁の醸成が、自他共に心豊かに生きることができる御同朋社会の実現に資すると考える。

参考文献

- 吾勝常晃『蓮如上人と現代』百華苑 1994
 浅井成海『御文章を読む』六角会館閣法シリーズ編集委員会 1997
 浅井成海監修『蓮如の手紙—お文・ご文章現代語訳』国書刊行会 1997
 稲城選恵『蓮如上人のことば』法蔵館 2007
 稲城選恵『蓮如上人の河内での『御文章』』永田文昌堂 2003
 宇野行信『聖典セミナーご文章』本願寺出版社 2000
 円日成道ほか『講座親鸞の思想』10 教育新潮社 1981
 梯實圓ほか『蓮如上人とともに』本願寺出版 1998
 梯實圓『蓮如—その生涯の軌跡—』百華苑 2002
 笠原一男『蓮如』吉川弘文館 1986
 鎌田宗雲『蓮如上人と『御文章』』百華苑 1995
 鎌田宗雲『御文章解説』永田文昌堂 1997
 木村武夫編『蓮如上人の教学と歴史』東方出版 1984
 清岡隆文「聖典セミナー御文章」『季刊せいてん』23～46 本願寺出版社 1993
 楠恭編『妙好人 才市の歌』法蔵館 1949
 楠昭英「蓮如にとっての廻心」『九州龍谷短期大学紀要』44 1998
 重松明久『中世真宗思想の研究』吉川弘文館 1986
 柴田秀昭『「濁世の御文章」蓮如上人と現代』東本願寺出版部 1998
 杉紫朗『御文章講話』永田文昌堂 1993
 鈴木大拙『鈴木大拙全集』第十巻 岩波書店 2000
 高木昭良『浄土三部経の意識と解説』永田文昌堂 1970
 高木昭良『正信偈の意識と解説』永田文昌堂 2005
 田代俊孝『真宗入門 御文に学ぶ』法蔵館 2002
 徳永大信「『教行信証』信文類と『御文章』」『九州龍谷短期大学紀要』42 1996
 徳永大信編『蓮如上人の総合的研究』永田文昌堂 1997
 千葉乗隆『蓮如上人ものがたり』本願寺出版 2005
 豊島学由『蓮如さまのこころ』探究社 1982
 内藤知康『御文章に聞く』本願寺出版 1998

- 林智康『蓮如教学の研究』永田文昌堂 1998
藤秀琿『藤 秀琿選集』第五巻 法蔵館 1982
本多弘之『人間成就の仏道一大無量寿経講義第三巻一』法蔵館 2010
育成研修部編集『真宗の教義と安心』本願寺出版 2003
石見の才市顕彰会編『ご恩うれしや』石見の才市顕彰会 1995
石見の才市顕彰会編『妙好人 石見の才市』石見の才市顕彰会 2005
勸学寮編『安心論題綱要』本願寺出版 2008
勸学寮編『浄土三部経と七祖の教え』本願寺出版 2008
浄土真宗教学研究所編『蓮如上人研究—教義篇—I』永田文昌堂 1998
浄土真宗教学研究所編『蓮如上人研究—教義篇—II』永田文昌堂 1998
浄土真宗教学研究所編『『御文章』ひらがな版—拝読のために—』本願寺出版 2011
総合仏教大辞典編集委員会『総合仏教大辞典』法蔵館 2006
龍谷大学編『蓮如上人研究』百華苑 1998